2024 1

令和6年1月10日発行（毎月1回10日発行）　通巻365号

人生100年時代　共生社会の生き方情報誌

さあ、言おう

公益財団法人
さわやか福祉財団

二〇二四年 謹賀新年

地域共生社会の実現に向けて
住民主体の助け合いを
さらに強力に推進してまいります

子どもから大人まで、誰もが自身の思いを生かし、
いきいきとふれあい助け合いながら暮らせる地域づくりに
財団一同、本年も全力で取り組みます

より一層のご支援を賜りますよう
どうぞよろしくお願い申し上げます

公益財団法人さわやか福祉財団　理事長　清水　肇子
職員一同

人生100年時代 共生社会の生き方情報誌

さぁ、言おう

2024年1月号

CONTENTS

2 新しいふれあい社会 実現への道 新春 巻頭言

多様性の時代だからこそ
ふれあおう そして体験しよう！
清水 肇子

4 広げよう つなげよう 地域助け合い 活動の現場から

**次の世代をおうえんして
子どもが輝けるまちにしよう**
ＮＰＯ法人みんなのおうえん団（群馬県富岡市）

12 「地域助け合い基金」助成先のご紹介／状況のご報告

16 連載 36 老いの暮らしを創る

「年 女」 福祉ジャーナリスト 村田 幸子

18 連載 人生100年時代を生き抜く知恵 ジェンダーの視点から 17

少子化対策はなぜうまくいかないのか
お茶の水女子大学名誉教授 袖井 孝子

新しいふれあい社会づくりに向けて

22 ご支援ありがとうございます。
さわやかパートナー（賛助会員）・ご寄付者の皆様のご紹介
23 活動日記（抄）

⑪財団ツールの紹介
⑳寄付のご案内
㉛みんなの広場 / 投稿募集
㉜さわやかパートナー・『さぁ、言おう』のご案内 / 表紙絵から

助け合いを広げよう！ 新・ひとりごと ● 清水 肇子

新春

巻頭言　新しいふれあい社会　実現への道

多様性の時代だからこそ
ふれあおう　そして体験しよう！

さわやか福祉財団　理事長　清水　肇子

新しい年の扉が開いた。コロナ禍により停滞していた地域活動の動きは活発になりつつあり、経済市場も活況を呈してきた。ようやく本格的に社会が動き始め、地域の人同士のふれあい、つながりが復活してきたのは本当にうれしい。

誰もが幸せに暮らせる社会づくりに向けて、知恵を出し合い、全国の皆さんと一緒に住民主体の助け合いをさらに深化させ、広げていく年としたい。

＊　＊　＊

もちろん課題はますます山積している。政策は待ったなしのギアチェンジが求められているが、ごたごたしている政治の状況は必要な選択肢を示し切れていない。さらに世界中で何かしら毎年想定外の事態が起きており、日本社会も大きな影響を受けている。もはや過去のデータや経験則による舵取りだけでは適切な答えが導き出せない時代となった。手探りでも未知なる挑戦を進め、異なるものへの関心と共感を育むという環境づくりが、学校でも企業でも、そして何よりも地域で、これから強く求められてくるだろう。

＊　＊　＊

そもそも人は、新しいもの、他と違うものに好奇心を持ち、見知らぬことに探究心を抱きながら、夢を語り合うことを楽しんで生きたいと願う生き物だろう。こうした欲求で長い年月をかけて発展してきた社会が、今、多様性という価値観にたどり着いた。

けれども、多様性を追求しようとする中で、国内外でさまざまな軋轢や衝突も生じている。往々にして、人が新しく得たいと欲する知識や情報は、自分が肯定し、関心を寄せている事柄や実際に持っているものが中心となる。それは共通の仲間づくりに有効であり、安心感を生み、ある種の原動力にもなるだろう。

しかしそれらが高じると、興味がない事柄や馴染みのない考え方についての意欲や関心は薄れ、さらには否定し、排除にすらつながってしまう。多様で異なる選択肢が増えれば増えるほど、意識して視野を広げなければ分断が進む。求める情報だけが洪水のように流れてくる昨今のＳＮＳの普及はこうした人間の欠点を知らぬ間に助長させてしまったのではないだろうか。

＊　＊　＊

私たちがこれから目指す地域共生社会は、あらゆる分野でこの多様性がキーワードとなるだろう。誰もが関心のある分野で年齢や性別、障がいの有無にも関係なく自己の思いを生かせる社会でありたい。そのためには、共感づくりが不可欠だ。異なるものへの関心を自然に高めるためには、主体的な体験による学びこそが一番である。助け合い活動への参加も体験して感じてみることからお勧めしたい。まずはふれあい、交じり合おう。とにかく行動して、やってみよう。少しでも知ることで理解が進み、自然に自分事としても考えやすくなる。

年始め、そんな新しい一歩を自分なりに考えてみませんか？

次の世代をおうえんして 子どもが輝けるまちにしよう

NPO法人みんなのおうえん団（群馬県富岡市）

子どもたちがそれぞれに困難を抱え、保護者も悩みの多い時代。「困ったときに助けてくれる人たちがいる」という安心感を次世代につなごうと活動する、「みんなのおうえん団」を取材しました。

（取材・文／塩瀬　潔泉）

小中学生の学習会&昼食 教えるのは高校生と大学生

国宝・世界文化遺産の富岡製糸場にほど近い、富岡公民館。ここで毎月第1日曜日に開催されているのが、「NPO法人みんなのおうえん団」が2017年から行っている小中学生向け無料学習会だ。公民館を借り切り、年代別に部屋を分けて、誰でも参加できる学習会が行われている。

エントランスでは、ボランティアの大学生に小学生が飛びついて話しかける姿が見られる。学習会とはいえ、低学年の子たちはここへ来てお兄さんお姉さんに相手をしてもらうのが楽しいようだ。高学年や中学生の部屋では、宿題やドリルに取り組む子たちに、高

学習会は年代別に部屋を分けて実施

校生と大学生が教えている。

ボランティアとして参加していた高校生たちは、「前回、学校で配られたチラシを見て来て、今日は2回目。部活などもあって忙しいけど、小さい子たちがかわいいので」「こういう活動をしている大学生がいると知って、すごいと思いました」と話す。小学5年生の子は「3年生のときから友だちと一緒に来てる。宿題が終わるし、ご飯がおいしいから」と笑顔だ。

午前の学習会が終わると、みんなのお楽しみ、昼食の時間だ。小中学生も、高校生・大学生も、地元の人たちが作ってくれた食事を受け取り、和室に行ってみんなで食べる。

小学生を送迎する保護者からも「本人が毎回楽しみにしています。下の子も、小学生になったら上の子と一緒に参加したいそうです」「親としては、日曜日に昼食を出していただけるのもありがたいですね」と学習会は喜ばれている。スタッフは、お土産のお菓子を手渡しながら保護者にも積極的に声をかける。子育てに悩みや不安を抱えている保護者もおり、心理カウンセラー、医学や教育を専攻している大学生、子育てを乗り越えてきた母親スタッフが保護者を囲んで話す時間を設けることもある。同じ経験をした人と話すことで、「自分だけじゃないんだ」と気持ちが楽になる保護者もいるという。

学習会の様子

フランスから来日している富岡市の国際交流員、ヴェロニック・ムーランさん（左）による英会話の学習。すごろく風の教材を使って盛り上がっていた

昼食を食べる子どもたち。この日はメンチカツと煮込み料理をメインに、野菜たっぷりの味噌汁とデザートの柏餅も

環境に左右される子どもたちの進路

「私も、息子が小さいときからシングルで子育てをしてきて、それなりに大変なこともありましたが、幸い、周りの友人や市内にある実家に助けられてきました。でもあるとき、『子どもの制服を買えない家庭がある』という話を耳にしまして。富岡には、塾や自習できる場所が少ないという声もありましたし、生まれ育つ環境によって子どもの進路が左右されているのではないか、と思いました。当時高校生だった息子とそんな話をしたら、息子が『僕が仲間を集めて小中学生に勉強を教えるから、お母さんたちがご飯を作ってあげて』と」

２０１７年の活動開始についてそう振り返るのは、おうえん団代表理事の靏田（つるた）あずささん。靏田さんが、子どもが幼稚園のときからのママ友である高橋啓子さんにこの考えを話すと、高橋さんはすぐに「いいよ。やろう」と言ってくれた。高橋さんはそれまでもＰＴＡ役員で大人数のカレーを作ったりした経験があり、それを子ども食堂などに生かせたら、と思っていたという。

「私が相談すると、『うん、いいよ』と必ず助けてくれる。本当に優しくて頼りになる人です」と靏田さん。

靏田あずささん（左）と高橋さん（右）

調理は、その日に都合の良い人が参加。終わった後の調理室での食事タイムも、ママ友の集まりのようで楽しそうだ

学習会での毎回の昼食作りは高橋さんがまとめ役となり、その日のスタッフや食材の手配をしているほか、思いつく知り合いみんなにＬＩＮＥ等で有償資源回収への協力を呼びかけ、食材購入などに充てている。「ここには来られなくても、そういう形で応援してくれている人がたくさんいます」と高橋さん。

活動を始めた頃、２人はフリーマーケットに出店。アロマセラピストである靏田さんのハンドマッサージで５００円ほど資金ができ、それで活動のための米を買ったことなども懐かしそ

うに話してくれた。学校などいろいろなところに活動のチラシを持っていったが、市内で前例のない活動になかなか理解が得られず、最初は子どもが数人来るだけだったという学習会。今では毎回、小中学生が50人ほど、大学生ボランティアは約25人の登録者の中から7人ほど、高校生ボランティアは約150人の登録者から20人ほどが参加している。鷭田さんや高橋さんの友人が中心の大人のスタッフも30人程度おり、できるときに受付や調理を担っている。

高校生向けの学習支援 学生部の活躍

午後は、大学生が高校生の学習支援を行う時間だ。場所は公民館から歩いてすぐの「よろずや文具店」。おうえん団の活動をぜひ支援したいという店の厚意で、店舗の3階にあるホワイトボードや机がそろった明るく快適なシェアスペースが無償で貸し出されている。大学受験を目指す高校生が勉強する様子は、午前の学習支援とは雰囲気が違う。医学部や教育学部に通うおうえん団学生部のメンバーや大学生ボランティア（登録者15人ほど）が個別指導のように丁寧に教え、進路相談や面接・小論文対策、自己推薦書の添削まで行っている。その結果、昨年度は有名国立大学や難関私立大学に複数の合格者を出した本格的なものだ。

先輩の紹介がきっかけで参加している学生部スタッフリーダーの髙島颯太さん（教育学部2年）は教員を目指しており、おうえん団には大学で得られ

よろずや文具店の外観と、シェアスペースで行われている高校生向け学習支援の様子

ないものがある、と語る。

「ここではいろいろな年代の子たちに関わることができて、楽しいですね。小学生は本当にかわいいですし、中学生と高校生では接し方も違うといった貴重な経験ができますので、感謝しています」

学生部会計の高間（たかま）咲輝（さき）さん（国際コミュニケーション学部2年）は、中学2年生のときに行政の紹介で学習会に参加した、親戚の家で生活しているAちゃんのエピソードを教えてくれた。相手との間に必ず何か物を置いて言葉少なに話す彼女に、最初は「触れられたくないこともあるのかな」などとあれこれ考えた。しかし、何度も接していくうちにすっかり仲良くなった。

「Aちゃん、笑ってくれるんだ、と思いました。彼女も普通の女の子で、壁を感じる必要はないと教えてもらいました」

学生部の皆さん。左から、靏田雄大さん、尾形穰さん（副代表、医学部5年）、髙島さん、高間さん、河野朱梨さん（教育学部１年）

Aちゃんはその後、定時制高校に進学し、毎日元気に登校している。

おうえん団は、困難を抱える子を直接支援したいとの考えから、隔週土曜日に大学生4人と大人2人が児童養護施設を訪問する学習支援も実施しており、現在は小学生10人を見ている。靏田あずささんが以前、おうえん団の構想を話し合ったという息子の靏田雄大さん（学生部代表、医学部3年）も、児童養護施設での支援を行っている。そこで一昨年、雄大さんが出会った一人の女子高校生がいる。

「大学に進学したいという強い思いを持っている子でした。高校生になったときからアルバイトをして、僕が支援を始めた高校3年生の6月には大学入学のための費用をすでに貯金してありましたし、奨学金についても自分で全部調べて手続きしていました」

そんな彼女の夢を雄大さんもかなえたいと思い、自身の学業の傍ら全力でサポートした。設立以来、4年制大学の合格者はいなかったその児童養護施設から昨年春、彼女は有名国立大学の合格を手にして巣立っていった。

「自分が高校生の頃は、とてもあそこまではできなかった。彼女のひたむき

さに、僕のほうが学ばせてもらいました」と雄大さん。

「自分が大学に合格したときは泣かなかったのに、彼女が合格したとき雄大は大泣きしていました。厳しい環境に置かれている子がいるのだと知り、彼女のおかげで成長させてもらいました」とあずささんは微笑む。

彼女は今、時間があると富岡に帰ってきて、おうえん団の活動に顔を出してくれるそうだ。

企業の支援と活動が及ぼす影響

おうえん団を支援している企業は、よろずや文具店だけではない。

活動を知って支援を申し出たのが、同市内の岩井建設株式会社だ。おうえん団の活動を知った代表取締役社長、岩井秀昭さんがすぐに担当社員を付け、所有する建物を改修しておうえん団に提供。これでおうえん団には「一ノ宮事務所」という拠点ができ、ここでも昨年9月から月2回、小中学生に無料学習会を実施、保護者の茶会も行っている。岩井社長は、自社はもちろんのこと他の企業にも声をかけて協賛金を募ってくれた。水道光熱費等の運営費や、「大学生も大事な子どもたちだ」と、大学生ボランティアへの謝金などがすべて協賛金で賄えるよう取り計らってくれている。

公民館の学習会の昼食で使われる食材は、同県高崎市の食品商社、日栄物産株式会社の社会貢献を活用。同社から提供可能な商品がLINEグループを通じて提示され、登録している子ども食堂などがリクエストすると、指定の場所まで届けてくれるというものだ。

昨年8月に開所した子どもや保護者の居場所「みんなの家」（週2回開催）も、長年使用していなかった工場の建物が持ち主から提供されたものだ。高校から使用しなくなった机などを譲り受け、地域の人たちが掃除をして使用できるようにしてくれた。

「何か困難を抱えている子や保護者を支援しながら、いろいろな年代の人たちの居場所にもしていければと思っているので、みんなの家は少人数で、まずは仲良くなれるようにと考えています」（靏田さん）

こちらも高間さんら大学生が、通ってくる子どもたちと一緒に遊んだり、勉強したり。うれしいことに、前出のAちゃんも登校前にみんなの家に寄って、子どもたちと一緒に過ごしてくれるそうだ。

地元に根付く企業は特に、地域に何らかの貢献や恩返しをしたいと考えており、マッチングがうまくいけばお互いにとって喜ばしいことだ。

おうえん団は、設立当初から身近な

人たちに地道に協力を呼びかけ続けてきた。学生部も、企業や行政、民間団体等との交流会に積極的に参加し、活動周知で若い力を発揮している。これらが実を結び、現在のような広がりを見せているのだ。

一ノ宮事務所での学習会の様子

最近、市内の高校が生徒のボランティア経験に積極的に取り組むようになったのも、おうえん団での高校生の活躍が少なからず影響している。児童養護施設の事例は、施設の子も高校卒業後に進学できることを示した。

＊　＊　＊

子育て期を過ぎると、そのときの困り事も一緒に過去のもの、つまり他人事になってしまいがちだ。しかし、誰かがそれを変えないかぎり、次の世代にも課題は依然として残される。だからこそ、おうえん団の皆さんが課題を解決したいと始めた活動に、今たくさんの子どもや地域住民、企業・団体が共感し賛同して、一人、また一人と参加者や協力者が増えてきた。取材中、「次は自分もおうえんする側になりたい」と話す子もいた。それぞれがお兄さんお姉さんたちの姿を見て、これからも活動を受け継いでいくだろう。

私たちもあらためて地域の希望である子どもたちに目を向け、みんなの力を集めて子どもたちと保護者を、ずっと〝おうえん〟していこう。

ＮＰＯ法人みんなのおうえん団

子どもたちが「困ったときは大人が助けてくれる」という安心感を持ち、自分がされてうれしかったことを次の世代にしてあげたいと思える環境を、地域全体でつくることを目標に活動。昼食付き月１無料学習会、ただ塾、保護者ルーム、児童養護施設での学習支援、各種イベント協力等を行っている。

●連絡先／〒370-2314　群馬県富岡市田篠2000-3
電話　090-5567-5153
ホームページ　https://minnanoouendan.org/

助け合いの地域づくりに、当財団のツールをぜひご活用ください

当財団ＨＰトップページ「ライブラリー」→「各種広報ツール」から無料でダウンロードもできます。「新・助け合い体験ゲーム」は 1,100 円（税込・送料別）となります。

みんなでやってみよう！
訪問助け合い活動

お互い様の気持ちを一歩進めて、自身の生活も、困っている誰かの生活も豊かにする「訪問助け合い活動」。主に高齢者の家の中で行う助け合い活動について詳しく解説しています。講師用解説書もあります。

いつでも誰でも行ける場所を広げよう！
居場所ガイドブック

地域の絆を深め、助け合う関係を広げるための共生型常設型居場所をつくりましょう。居場所のつくり方、事例、活動への支援のあり方など、実践ノウハウが分かるガイドブックです。

新・助け合い体験ゲーム

地域の助け合い活動における、ニーズと担い手発掘を体験できるゲームです。助け合いをつくる関係者の研修や住民勉強会等で、効果的に活用していただけます。

【お問い合わせ・お申し込み】

電話（03）5470-7751　メール mail@sawayakazaidan.or.jp

応援ありがとうございます！

「地域助け合い基金」助成先のご紹介

皆様のご寄付を原資に、さまざまな世代・人々が参加する地域共生社会への取り組みや、コロナ禍での困りごと解決のための活動を支援している「地域助け合い基金」。今月号は、住民同士の助け合い活動、保育所の空きスペースを改修した学習支援等、空き地を改良した地域農園の活動を紹介します。

なお、このほかの助成先団体の活動報告も財団ホームページに随時アップしていますので、思いが詰まった多彩な活動をぜひご覧ください。

群馬県前橋市

困りごと解決を通して住民同士が交流 情報交換会や会合で活動報告も

川曲町社協　ちょっとしたお助け隊

助成金額　15万円

「川曲町社協　ちょっとしたお助け隊」は、一人暮らしや高齢者世帯を主な対象として、ちょっとした困りごとを抱える人を住民同士で支え合い、交流やつながりの機会をつくって、誰もが孤立しない住みやすいまちを目指し、2021年に設立されました。一般ごみ出し、粗大ごみ搬出、電球交換、蛇口の簡単な不具合の修理、包丁研ぎ等の支援を、実費以外無償で実施しています。

お助け隊立ち上げに際しては、隊の中心メンバーと第2層SC、地域包括支援センターが複数回会議を行い、SCらからアドバイスや支援があったということです。

本基金の助成金は、活動に必要な道具類の保管用倉庫購入費、ボランティア保険料、事務消耗品購入費、「お助け隊だより」印刷費等に活用していただきました。「包丁研

ぎ祭り」では2日間で112件の要請があり、すべて行ったとのこと。庭木の伐採では、依頼者の要求に従って行うことで、孤立しがちな利用者とコミュニケーションを取る手助けになったということです。

さらに、隣の渋川市社会福祉協議会と情報交換会を実施したり、前橋市社協の協力で市内17町の民生委員や自治会長など70名が参加する会合で活動報告もされたそうです。

今後も、住民が自分らしく安全・安心して生活できる環境づくりに活用できる場所を広げていきたい、との報告を下さいました。

活動の様子（包丁研ぎ）

東京都あきる野市

子どもたちの学習支援に保育所の空きスペースをみんなで整備

成川　理枝

助成金額　6万4000円

助成金で製作した机と椅子で学習する子どもたち

成川理枝さんは2013年から地域のクラブハウスを借りて、子ども向け「寺子屋学習会」を開催。作文やパズル問題を中心に、子どもたちが楽しく勉強できるような時間と空間を提供してきました。また、漢検、英検等の実施会場として、遠くに行かなくても受験できるようにし、対策講座も格安で提供。コロナ禍による経済格差に対して、自由設定料金での算数復習講座や中高生向け自習室の時間も設けています。

安定した学習環境を探していたところ、地域の保育所がスペースを提供してくれることになりました。このスペースを、午前中は幼児と親の居場所、放課後は子

どもたちの遊び場、夕方からは学びの場、夜間は中高生の自習室として活用するため、本基金の助成金は、机・椅子・棚製作の材料、トイレ改修用資材、ヒーター購入、文具・雑貨購入等の費用に充てていただきました。

スペースの環境づくりには、地域の大人や子どもが掃除に参加、お寺がごみを捨てるために軽トラックを提供、リフォームの仕事をしている人がトイレ修理、畳屋さんがきれいな中古の畳を寄付するなど、たくさんの人たちの協力があったということです。

「この場所を使って、子どもたちの学習支援を中心に、いろんな人たちが楽しく集まれる活動をたくさんしていきたい」と今後への思いを寄せてくださいました。

岐阜県各務原市

多世代による農園での苗植え 児童、学校、高齢者のさらなる交流へ

蘇原南部地区社会福祉協議会

助成金額　15万円

蘇原南部地区では、雑草が覆う空き地を耕すなどして改良し、2022年3月に、野菜作りを通して人と人、人と自然がふれ合う農園を開園。子どもから高齢者まで60名を超える交流の場がスタートしました。畑は、20名ずつの3グループで何を植えるか考えることから始め、今までにない地域のつながりがつくられつつあります。隣接する小学校との交流も進め、特別支援学級の児童とサツマイモを植えたり、保育所の散歩コースになるなどしているそうです。

この土地は高台にあり、雨による崩れ防止と雑草が生えないようにするため、高低差のあるところにリピアという多年生植物を植えることになり、本基金の助成金はリピアの苗購入に充てていただきました。

苗植えは、小学校の授業の一環で地域住民が児童たちに教えながら行ったとのこと。児童には学校の先生以外から物事を教わることがとても刺激になり、見守りボランティアの高齢者からは登下校中のあいさつ以外に交流できる機会となったこ

地域住民と子どもたちによるリピアの苗植えの様子

とから、「距離が近づいてうれしかった」という感想も聞かれたそうです。

その後、学校からクラブ活動として「農園クラブ」を立ち上げるので交流を深めたいとの提案もあり、「地域の小学校児童とつながるキッカケと地域福祉活動への理解につながりました」と報告をいただきました。

「地域助け合い基金」状況のご報告

皆様のご支援により全国各地の助け合いを助成している「地域助け合い基金」。12月15日までの状況をご報告いたします。

（12月15日　当財団ホームページ開示時点）

◎寄付受付額
221件　1億7353万7836円
このうち当財団より1億4162万1000円を供出

◎助成実行額
1048件　1億6334万9034円

地域助け合い基金は、地域共生社会の実現を目指し、助け合い活動のスタート・継続を支援しています。引き続き皆様のご支援・ご寄付をよろしくお願い申し上げます。

（事務局長・内田）

当財団ホームページでは毎日、寄付と助成金額を開示しており、助成可能な金額もご覧いただけます。寄付や助成をお考えの方は参考にしてください。

クレジットカード決済ページ

財団ホームページ内基金関連ページ

●基金に関する情報、およびクレジットカード決済は、ＱＲコードもご利用ください！

基金に関するご意見・お問い合わせ

＜地域助け合い基金担当＞
電話：(03) 5470-7751　FAX：(03) 5470-7755
メール：tasukeai-kikin@sawayakazaidan.or.jp

連載 36

老いの暮らしを創る

「年女」

福祉ジャーナリスト　村田　幸子

今年、私は年女です。何かいいことがありそうな予感がするのですが、これまでの経験ではそんなことは何もなく、ごく平凡に年が過ぎていきました。それでも今年はどうかと、根拠もなく期待しています。

ホームで暮らすという選択をして、1年半。これまでと変わらぬ暮らしをしているという実感に安堵感を覚えています。しかし暮らし振りは大分変わりました。その一端を、少し。

食事は、朝は自分で作っていますが、昼、夜は面倒だったり、美味しそうなメニューの時はホームのレストランへ行きます。便利な半面ついつい易きに流れ食材を無駄にしてしまうなど、その按配はなかなか難しいです。レストランへは皆身支度を整えてきますので、暮らしにメリハリが出て、お洒落をする楽しみもあります。他人の目があるというのは大事なことですね。

ホームには600人もの入居者がいますので、一つの地域社会です。一人暮らしの時より接する人の数はずっと増え、それだけたくさん情報が入ってきます。他愛もない話の中からホームの行事や世間の動き、近隣の医療情報や安くて美味しいレストランのことまで。しかも情報は新鮮です。一方で、本人の誤解や話に尾ひれがついて、誤った情報として広まっていく怖さもあります。特に病気や介護のことに関してはその傾向が強く、それだけ入居者にとっての一大関心事なのでしょう。

ブリッジを始めました。小難しいコントラクトブリッジではなく安易なミニブリッジというもの。趣味の世界は、その道に詳しい人がやりたい人を募って教えてくれます。週1回、舌戦を交えての勝負？の世界は、人柄を知るいい機会。人間関係も深まります。

まあ、こんな風に日々が過ぎていきますが、これも元気なうちに早めの決断をしたからだと思います。新たな暮らしを作り上げるには体力・気力が残っているうちが大事と、改めて実感しています。とはいえ加齢と共に身体のあちこちに軋みが出てきたのは否めません。毎日の健康状態を確かめ、無理せぬようそろりそろりと高齢期の歩みを進めています。

それにしても若い頃考えていた老いのイメージと、実際に今、高齢期真っ只中の日々を過ごしていて、何と大きな違いがあることかと驚いています。若い頃は漠然と、高齢期という時期を一括りに考えていました。しかし60代、70代、80代ではその彩りが全く異なりますし、人それぞれです。私自身、70代はまだ社会の動きの中に身を置いていたという実感がありましたが、80代になると急に社会からの疎外感を感じました。仕事を辞めたこともあるでしょうが、社会の歯車から突如はじき出されたような気がして戸惑い、不安でした。でもいつしかそんな戸惑いは消えて、ごく自然に新たな暮らしの中に身を置いていました。

人生100年時代は特別なことと思っていましたが、今や誰にもその可能性があります。にもかかわらず私たちはまだ昔ながらの高齢者観に捕らわれ、老いを一括りにして考えているのではないでしょうか。90代のステージにはまた違った老いの姿があるはず。高齢期は実に彩り豊かです。年を取れば取るほど楽しいと言えるよう、年を重ねていきたいものです。

（むらた　さちこ）　立教大学英米文学科卒業後、NHKにアナウンサーとして入局。報道番組のリポーターや社会性のある硬派の番組を中心に担当。1990年、解説委員に就任。NHKスペシャル「あなたが寝たきりになった時」、NHKモーニングワイド「高齢化社会」のキャスター他、多くの番組を担当。2004年、解説委員を退任後も高齢者問題の第一人者として活躍中。

人生100年時代を生き抜く知恵 17
ジェンダーの視点から

少子化対策はなぜうまくいかないのか

お茶の水女子大学名誉教授　袖井　孝子

「異次元の少子化対策」の旗印の下に、少子化に歯止めをかけようと日本政府は、子育て家庭に対するさまざまな支援策を講ずることになった。しかし、わが国の少子化は、今に始まったことではない。1970年代の後半から、出生率はじりじりと低下し始めており、少子化の傾向はすでに半世紀近くも続いている。

70年には、総人口に占める65歳以上の比率が7%を超え、日本が本格的な高齢化社会に突入した。当時は、もっぱら増大する高齢人口にどう対処するかに大きな関心が払われ、各政党は選挙の度ごとに年金や福祉の拡充を掲げて、投票率の高い高齢者の票を狙ったものである。

少子化の危機に初めて気づかされたのは、一人の女性が生涯に産むと推計される子ども数である合計特殊出生率が1・57に達したことが明らかにされた90年のことである。この数字は、丙午の年である66年の1・58を下回るため、1・57ショックとよばれた。

その後、94年には仕事と子育ての両立支援をめ

（そでい　たかこ）
お茶の水女子大学名誉教授、東京家政学院大学客員教授、一般社団法人シニア社会学会会長、一般社団法人コミュニティネットワーク協会会長、NPO法人高齢社会をよくする女性の会副理事長。専門は老年学、家族社会学、女性学。主な著書に『変わる家族　変わらない絆』『高齢者は社会的弱者なのか』（以上ミネルヴァ書房）、『女の活路　男の末路』（中央法規出版）、など多数。

ざす「エンゼルプラン」が、99年には仕事と子育ての両立支援だけでなく、雇用、母子保健、相談などを含めた「新エンゼルプラン」が策定された。

こうした施策にもかかわらず出生率はますます低下し、2003年にはとうとう1・29に達してしまった。人口学の専門家によると、1・30はそのまま放置しておくと、国家としての存続が難しくなる危険水準である。そこで1・29ショックという言葉がメディアを駆け巡った。

03年には「次世代育成支援対策推進法」や「少子化対策基本法」が成立した。一連の施策や法律は共通して、「結婚や子育ては個人の自由な選択に委ねられるべき」であり、「子どもを産みたい人が安心して産めるような環境を整備すること」を提唱している。

06年に策定された「新しい少子化対策」では、子育て支援や働き方改革に加えて、家庭の大切さを理解させ、子どもを産み育てやすい社会を実現するための国民運動の展開が勧められている。家庭の大切さを理解させるために「家庭の日」を設けたり、3世代同居を奨励するというのだから、まったくの時代錯誤というほかない。

少子化対策の流れを振り返ると、仕事と子育ての両立支援から男性も含めた働き方の見直しへとその対象を広げてきている。一見すると誰もが望ましい暮らしができる社会の実現をめざしているかのようだ。しかし、その裏には子どもを未来の労働力ないし社会保障制度の支え手とみなし、何とかして人口を増やしたいという政府の本音が透けて見える。

女性たちの間に、戦前の国家による出産奨励策の再現ではないのかという疑念が生じているのも無理はない。

物価高、異常気象、国際的な緊張と紛争、政治におけるリーダーシップの欠如等など不安いっぱいの社会で「安心して子どもを産み育てられる環境の整備」は、果たして可能だろうか。

さわやか福祉財団は皆様のご支援によって活動しています

さわやかパートナー（賛助会員）として、
ご支援をどうぞよろしくお願い申し上げます。

個人会員、企業・団体等の法人会員ともに、どなたでもお申し込みいただけます。
税制優遇措置もあります。詳しくは、32ページをご参照ください。

◎１回ごとに金額を自由にお決めいただく一般ご寄付も、随時受け付けております。

■ ご寄付全般に関するお問い合わせ ■

電話（03）5470-7751
メール mail@sawayakazaidan.or.jp

新しい
ふれあい社会づくりに
向けて

ふれあい　いきがい　助け合い

さわやか福祉財団は、子どもから高齢者まですべての人が、
それぞれの尊厳を尊重しながら、いきがいをもって、
ふれあい、助け合い、共生する地域社会づくりを一貫して進めています。
さらに、全国自治体が地域支援事業で取り組んでいる
住民主体の助け合いの地域づくりも強力に支援しています。
どうぞ、皆様の地域の情報もお寄せください。

- **ご支援ありがとうございます。**
  さわやかパートナー（賛助会員）・
  ご寄付者の皆様のご紹介
- **さわやか**活動日記（抄）

ご支援ありがとうございます。

さわやかパートナーは、本財団の趣旨にご賛同いただき、財政的・精神的にご支援くださる賛助会員の皆様です。
会費は寄付金の一種として大切に活用させていただきます。
新規ご入会の会員の方、会員をご継続いただきました皆様も毎号ご紹介いたします。
また、個別のご寄付をいただきました皆様もご紹介させていただきます。

（敬称略）（2023年11月1日～11月30日財団受付分）※なお、自動振替の場合等、処理日と財団受付日にずれが出て掲載時期がずれる場合がありますことをご了承ください。

さわやかパートナー個人（39件）

（都道府県別50音順）

北海道
加藤　孟
斉藤　真由美

岩手県
大久保　孝信
戸田　公明

宮城県
秋山　喜弘
小松　沙織

福島県
根本　良一

茨城県
古山　均
野崎　照子

埼玉県
大藤　玲子
平居　和佐子
平澤　やす子
前田　恭平

千葉県
青木　敏郎
勝又　烈
佐野　敏子
田中　達夫
橋本　邦義
星野　征朗

東京都
岡本　隆夫
熊谷　展一
坂本　大輔
森　恒俊
山口　浩一郎
渡邉　正之

神奈川県
川口　浩平
草島　佳子
洲﨑　一雄
松岡　紀雄
山中　一彦

長野県
中下　秀子

大阪府
高橋　愛子
中村　益久
播村　昭子
吉田　薫

兵庫県
徳永　愛子
藤本　幸延

奈良県
橋本　昌子

高知県
野口　喜久子

さわやかパートナー法人（6件）

（50音順）

株式会社三省社印刷所
株式会社サンハート
初山別村
関彰商事株式会社
株式会社セラピスト
長野県生活協同組合連合会

一般ご寄付（5件）

（50音順）

芦原　武司（30万円）
上野谷　加代子（1万円）
國生　美南子（5万円）
徳永　愛子（7千円）
一般財団法人年金住宅福祉協会（300万円）

地域助け合い基金ご寄付（1件）

（ご寄付日付順）

匿名希望（1万円）

さわやか活動日記（抄）

地域支援事業の活動報告は、このページのほかに当財団ホームページにもアップしています。ぜひご覧ください。

SC＝生活支援コーディネーター

column

みよし市が進める話し合いの仕組みと住民の助け合い活動への意識

■愛知県みよし市■ 担当　共生社会推進リーダー・長瀬　純治

みよし市では、市内を3つの圏域に分けて、定期的な地域住民の話し合いが行われている。この話し合いの場は、同市が自治体として介護保険の制度として取り入れている「協議体」という仕組みだ。ただ、このように説明すると、行政によって招集された委員会などを想像するかもしれないが、実際の現場の様子は全く違う。

一般的に、話し合いの場というのは、何について話し合うのか、そのテーマが決まっているからこそ、集まった人々が意見を交わし、結論を出すことができる。しかし、この仕組みには事前に決められたテーマがない。行政などの関係者が事前にテーマを決めるのではなく、この仕組みに参加する住民たちが、それぞれに持ち寄った地域の最新情報を共有することを目的としているためだ。

そのため、この仕組みに参画する住民は、関係者の決めたテーマについて、期限内に結果を出さなければならないような組織的な責任を負う必要はないが、逆に、関係者にお願いされて引き受けるような受動的な姿勢では、自分の役割を果たすことはできない。あくまで自発的に、積極的に関わる意識が求められる。

同市では、昨年11月7日にこの3圏域の協議体に関わる人々が集まり、互いの取り組みの様子を共有する「全体会」の企画が開催され、当財団として情報共有で協力した。このとき、正にこの住民の前向きな意識が強く印象に残った。具体的には、この仕組みに関わる上で、自身の役割をしっかりと理解できていることや、地域に対する関心が高く、同じ意識の中で信頼関係が深まっている様子も感じられた。

同時に、関係者の立ち位

置も印象的だった。先述の通り、この仕組みでは、住民の自発性を重んじることが大前提になっているが、とはいえ、毎月1回の頻度での開催を継続することは、住民の意識だけでできることではない。ここで必要になるのが関係者のバックアップ力と言えるが、正に同市の行政、市社会福祉協議会、地域包括支援センターの関係者は、現場の進捗を確認しながら、チームワークでこの仕組みを支えている様子がうかがえた。

協議体の仕組みには長期的な狙いとして、地域の助け合い活動を創出することが想定されている。ただしこれは、あくまで「互助を基本」とした考え方が前提となるため、すべて住民の取り組み方次第であり、関係者の思惑通りには進まない難しさがある。ところが、同市ではすでに、買い物の不便さに対する協議から、移動販売の取り組みが広がったり、あいさつ運動や学生服のリサイクル活動、さらには認知症の人の地域見守りなど、さまざまな地域の助け合いの取り組みが創出されている。

この実績の中で特に素晴らしい点は、活動の内容もさることながら、協議体に関わる住民や関係者が、この結果に甘んじていないことだ。11月の全体会では、さらなる地域活動のアイデアや協力者の発掘に向けたワークを実施した。積極的に意見交換を行う参加者は、皆笑顔で取り組んでいた。

今後、この協議体の仕組みを地域の基盤として、地域共生社会の実現に取り組む同市の活動は、自治体規模に関わらず、参考になる点は多いのではないだろうか。

各地・各事業の取り組みをご紹介します

「活動創出」をテーマに
福井県SC養成全体研修会開催

■福井県

【11月14日】福井県主催のSC養成全体研修会が開催され、当財団も協力した。対象者は県内の第1層・第2層SC、行政担当者等で、約60名が参加。今年度は、県内の第2層協議体設置の進捗状況を踏まえ、協議体の重要性を伝えるテーマから「活動創出」にステップアップしている。特に、「協議体で実践する活動」をイ

メージできるよう、活動創出のプロセスを重点的に伝えることを意識したプログラムとしている。

福井県主催ＳＣ養成全体研修会の様子

行政説明に続き、事例発表①として岡山県倉敷市元第1層ＳＣの松岡武司氏から「住民主体の活動創出について」と題して発表が行われ、それを受けて「倉敷市の活動創出のポイントはどこか、自分の地区で取り入れられる部分はどこか」についてグループワークを実施した。

事例発表②は、同県大野市第2層ＳＣの北澤咲子氏から「協議体の設立とその活動について」。それを受けて、①と同じテーマを大野市に置き換えてグループワークを実施した。

財団からは「住民主体の活動創出のプロセス」として講義。その内容を踏まえて「活動創出につなげるためのステップ」をテーマにグループワークを実施した。

グループワークの発表では、事前アンケートの内容「1層と2層の連携」「ＳＣの協議体でのリードの仕方」「住民の気持ちが前向きになる要素」等も取り上げながら、意見交換も行った。「熱意を持って接すれば、応えてくれる住民はまだまだいると感じた」「おせっかいは人のため＋自分のため、という発想を意識したい」「日常会話の中にもアンテナを立てて、小さいことでも食いつくことが大事」「トップダウンでつくっていない協議体の力を感じた」「住民が何を求めているか、しっかりと耳を傾け、寄り添うことが大切」「居場所の男性参加に苦心していたが、役割を与えることを試したい」等の意見が出た。

今回の内容も踏まえ、1月には情報交換会を実施予定である。

（髙橋　望）

5年ぶり市民フォーラムに200人超が参加
実践発表と寸劇で楽しく助け合い考える

■ 新上五島町（長崎県）

【11月26日】新上五島町で5年ぶりの市民フォーラムが開催され、町民200人以上が参加。長崎県のアド

バイザー派遣事業により当財団が講師として協力した。同町は人口約1万7000人、高齢化率44%、2005年に5町村が合併してできた離島のまち。交通の便も決して良くなく、人口が減少している。コロナ禍の間、地域での働きかけを活発に行うことはできなかったが、地道に勉強会などを重ね、町社会福祉協議会の事業として「さぽする」という有償ボランティアが立ち上がっている。65歳以上を対象に介護予防ポイントを付与しており、活動会員54人、利用会員31人が参加している。また、浦桑地区では住民主体で「うらくわお互いさま隊『えにし』」が立ち上がっており、会員20人で有償ボランティアと地域食堂を始めている。その2つの活動を紹介しながら、さらに助け合いを広げていこうという目的で開催された。

石田信明町長の開会あいさつと、SCによる町の現状と課題の報告に続き、財団から「助けてと言えますか？　～助け合いの仕組みでお互いさまの地域を広げよう～」と題して基調講演。特に有償ボランティアの事例を中心に、サービスではない助け合い、どんな人たちがどのように関わっているか（できる人ができるときにできることをする）や、助け合いに参加しての声を伝え、さらに多くの皆さんの参加を、と呼びかけた。

実践発表は、「さぽする」と「えにし」から。「さぽする」は町社協が事務局で、会員も徐々に増え始めている。「えにし」は住民発の地区での取り組み。「やってみよう」と地域住民が立ち上げ、家族のような関係が地域に生まれている。とても柔軟であり、正に助け合いの好事例だった。

質疑応答では双方の活動に質問が出たが、「えにし」の取り組みをもっと地域全体に広げられないか、障がい者も参加しているか、等の質問があった。回答は「今のところ、浦桑の中でと思っている。地域食堂は障がいの有無に関係なくと思っているが、まだ参加はない」との回答で、地道にできる範囲でやっていきたいという様子が感じられた。

盛り上がったのは寸劇。新上五島町らしく、面白さの中にも住民主体の活動の必要性を伝えるものだった。

参加者に大好評だった寸劇の様子

2人の高齢者が高齢化・過疎化に伴い、担い手不足、介護保険料も県内で一番高いという状況を話すところから始まり、このフォーラムがきっかけで助け合いが広がり、介護保険料も下がり、担い手不足も解消している20年後の2043年にタイムマシーンで飛んで、住民の声を聞くという内容だった。

講評で財団から、「有償による助け合いに参加してみたい、始めたいという方はぜひ始めていこう」と呼びかけ、始めるときに事務局は少し難しいという方は「さぽする」で体験してみてはどうか、また、「えにし」のような取り組みをと思った方は「えにし」に見学や相談に行き、自分たちの地域で仲間をつくって話し合いを始めてみてはどうか、と伝えた。SCに登壇してもらい、「SCの皆さんがバックアップしていく」と伝え、SCが自己紹介と呼びかけを行い、「一緒に取り組んでいこう」とまとめた。

参加者のあたたまった気持ちが冷めないうちに、地域の動きが始まることに期待したい。（鶴山　芳子）

情報・調査事業

調査政策提言プロジェクト

厚生労働省　地域づくり加速化事業に協力

【11月13日】

■壬生町（栃木県）

老健局主導型の地域づくり加速化事業として、壬生町で2回目の支援が行われ、当財団もアドバイザーとして協力した。目的は同町の介護予防にコアに関わる関係者が集まり、現状を共有するとともに目指すべき自立支援の形を具体化し、その実現に向けた手立てやアイデアを出し合うことである。

午前中は、行政担当課と支援チームでの戦略会議。町としての介護予防ケアマネジメント、サービス等の対象者の整理、同町が定義する「居場所」について、昨年9月の1回目の支援やその後の1・5ミーティングを受け、町として話し合った内容の説明を共有し、午後の進め方について議論した。

午後は、地域包括支援センター、総合事業のサービスC実施事業所、ケアマネジャー連絡協議会、社会福祉協議会からメンバーが加わり、支援会議を行った。最初に、同町健康福祉課長の伊藤隆氏が「町の思い」

を語り、続いて村井千賀アドバイザー（石川県立ここころの病院認知症疾患医療センター副所長）より「介護予防ケアマネジメントの基本的なこと」として講義があった。その後、2グループに分かれてグループワークが行われた。現在あるサロンなどの通いの場の現状を共有し、サロン同士の情報交換会など既存の活動を充実する方法の提案。やらされ感を払拭しながら、強みである自治会のモデル地域での仕掛け、行政や包括等の後方支援など、多様な知恵を共有した。

終了後、振り返りを行った。多様な関係者が情報を共有し、高齢者も元気になる地域づくりに向けて議論することによって、一緒に取り組んでいこうという行動につながる意欲が見られ、主体的な住民の取り組みも共有できた。「住民の声が地域から上がってくる取り組みが大切」と担当課長からもコメントがあり、同町のチームが、支援チームとの協働であるこの事業により動き出しそうな気配が感じられた。チームで何か一つ、できることにトライして地域の反応を感じながら前に進むことも有効では、という意見も出された。壬生町チームが2・5ミーティングに向けて動きを進めていく。支援チームとしてバックアップしていきたい。

（鶴山　芳子）

令和5年度 第2回

かながわコミュニティカレッジ運営委員会に出席

【11月28日】「令和5年度第2回かながわコミュニティカレッジ運営委員会」が開催され、委員として出席した。議題は1・令和5年度かながわコミュニティカレッジ運営業務の中間報告について、2・令和6年度かながわコミュニティカレッジ運営業務委託団体募集に係る主な仕様書の変更点について、3・令和6年度かながわコミュニティカレッジ運営業務委託団体募集案内について。伊藤真木子座長（青山学院大学コミュニティ人間科学部教授）の進行で活発な議論が行われた。1は、受託者の「ソーシャルコーディネートかながわ」が報告。今年度の延べ受講生数が、見込みも含めて年間計画値の約145%と増えていることや、その対応策を共有。また、令和4年度の受講修了生アンケート調査結果を共有し、意見交換を行った。コロナが5類となり、積極的な受講生が増えている傾向とのことだった。当財団からは「県単位での講座受講生が終了後に地元などで活動したいときに、どこに行けばいいのかが分かるように、各市町村での中間支援団体

などをリストアップして情報提供してはどうか」「アンケートでは、受講後に新たに活動を始めている例がたくさん見られるが、この内容を講座主催団体にフィードバックすることで励みになるのではないか」などの提案をした。2や3についても、各委員からより良いコミュニティカレッジになるように終了時間を超えて議論がなされ、活発な委員会となった。

（鶴山　芳子）

ふれあい推進事業

復興支援プロジェクト

「ふくしま避難者交流会」開催

【11月18日】「ふくしま避難者交流会」が東京・有楽町の東京国際フォーラムで開催された（主催・福島県、共催・さわやか福祉財団、東京都）。交流会は、東日本大震災により福島県から首都圏に避難されている方々を対象とし、交流や情報交換の場の提供、福島県の復興に向けた取り組みに関する情報提供を目的として例年開催されてきた。2020年、21年と新型コロナウイルス感染症の影響で開催を見合わせた交流会だが、22年に続き開催することができた。

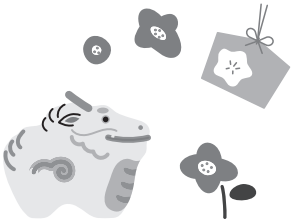
交流会は、福島県避難地域復興局・宍戸陽介局長の開会あいさつで幕を開け、共催の東京都、当財団のあいさつに続き、福島県原子力損害賠償請求についての説明、今回参加された避難者皆さんの避難元である福島市、いわき市、南相馬市、楢葉町、富岡町、大熊町、浪江町の職員からのあいさつや近況報告があった。その後は、ふるさと福島県で農業に取り組まれている方、新しく店をオープンした方などの様子を収録したビデオ上映や、浪江町で開催中の十日市まつりのライブ中継があり、クイズもあって参加者全員で楽しんだ。続いて、福島県立医科大学の大平哲也教授と全日本笑いヨガ協会高田佳子会長による「笑いヨガ」の説明・実践が行われ、会場全体が笑いに包まれる中、楽しく身体を動かすことができた。

会場では、避難元自治体職員と会話を交わす参加者や参加者同士楽しそうに交歓する様子も見られ、交流

会への参加が良い機会になったと思われる。

震災から12年が経過し、会場に設置されたパネル等でも避難指示区域が縮小され、福島県全体の災害復旧事業の進捗が説明されていたが、いまだ避難者数は約2万7000人（内、県外避難者約2万1000人。震災発生直後約16万5000人、内、県外避難者約6万2000人。23年5月現在）を数える。財団としても、引き続き避難者の皆さんに対していろいろな形での支援を継続していきたい。

（内田　信幸）



事務所だより

●いつも手帳に出張の予定がビッシリの共生社会推進リーダーTさん。助け合いを全国に広げようと頑張っている姿に頭が下がるが、たまにはリフレッシュもしてほしい…。そう思っていたら先日、好きなプロ野球チームのキャンプを遠方まで見に行ってきた、とうれしそうに話してくれ、何だかこちらも少しホッとした。ときには元気の源となる余暇も取り入れて、職員皆いきいきと地域の皆さんを支援していこう！

みんなで、誰もが安心して暮らせる
地域共生社会をつくりましょう

公益財団法人
さわやか福祉財団

みんなの広場

防災防犯に努めます

高嶋　宏臣さん　84歳　兵庫県

昨年11月号巻頭言「身近な防犯から考える地域づくり」を読みました。

昨年は居住地区の防災防犯委員に任命され、毎月警察と打ち合わせを行いました。また、県警からは「サイバー防犯ボランティア」として指定され、10年以上活動してきました。コロナが発生する前までは毎年数回、小中高校でサイバー犯罪についての講演をしてきました。

委員として、日常生活での防災防犯の強化に努めていきたいと思います。

折々のご意見、ありがたく拝見しています。SNSに起因するサイバー犯罪は、子どもにとっても大変深刻ですね。ご講演内容や反応など、ぜひまたお知らせください。

コメント　Keiko Shimizu

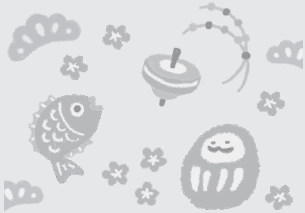
投稿募集

『さぁ、言おう』は皆様の声を社会につなげる問題提起型情報誌です。

ぜひ皆様の声をお寄せください。

送付先

〒105-0011
東京都港区芝公園2-6-8
日本女子会館７階
公益財団法人さわやか福祉財団
『さぁ、言おう』編集部宛
FAX：(03) 5470-7755
E-mail：
pr@sawayakazaidan.or.jp



『さぁ、言おう』はみんなで新しい社会のあり方を考える問題提起型の情報誌です

■さわやか福祉財団の活動をさわやかパートナーとしてご支援ください。

『さぁ、言おう』を毎月お手元にお届けいたします。
さわやかパートナーは、さわやか福祉財団の理念と活動に共感して会員としてご支援いただく賛助協力者の皆さんです。

個人年会費	Aコース	10,000円
	Bコース	3,000円
法人年会費（1口）	Aコース	100,000円
	Bコース	20,000円

公益財団法人さわやか福祉財団の会費は、特別な特典を付与するものではない賛助会費であり、寄付金の一つの形です。

■寄付金は税金の優遇措置が受けられます。

さわやか福祉財団へのご寄付は、所得税、法人税等の優遇措置が受けられます（さわやか福祉財団は所得税の税額控除対象の公益法人です）。

一般ご寄付をいただく場合のお振込口座

口座名義：公益財団法人さわやか福祉財団
郵便払込　００１２０-９-６６８８５６※
三井住友銀行　浜松町支店　普通預金　口座番号２７５４５７４
みずほ銀行　浜松町支店　普通預金　口座番号３３８３３２６
三菱ＵＦＪ銀行　浜松町支店　普通預金　口座番号３７３１７１４
りそな銀行　芝支店　普通預金　口座番号１１７４２９７

※払込手数料不要の郵便払込取扱票をご用意していますので、お申し出いただければ郵送いたします。

＊お問い合わせは、編集部あるいは社会支援促進チームまでお気軽にご連絡ください。
電話（03）5470-7751　メール　mail@sawayakazaidan.or.jp

表紙絵から

はり絵・池田げんえい

「初春」富士（静岡）

編集後記 ●本年も『さぁ、言おう』をよろしくお願い申し上げます。●「活動の現場から」は、群馬県富岡市から。上の世代の姿を見て、子どもたちが活動を受け継ぐ循環ができていくでしょう（Ｐ４～）。●「いきがい・助け合いオンラインフェスタ」の動画を一部、ホームページで公開しています（裏表紙）。

【お詫びと訂正】
昨年12月号「広げよう　つなげよう　地域助け合い」の取材文内に誤りがありましたので、お詫びして訂正いたします。P16上段「はじめに区長は」とあるところ、「区長」を削除します。

助け合いを
広げよう！

新 ひとりごと

清水　肇子

普段忘れがちなこと
自分のことを自分で決められる喜び
新しいことを始められる環境のありがたさ
大変な状況や壁があっても
それがまったく当たり前でない人から見れば
なんと幸せなことだろう
そんな幸せがどんどん分かち合える年になるように
地域発の助け合いをさらに皆で進めていこう

●公益財団法人さわやか福祉財団理事長
高齢社会NGO連携協議会の共同代表に昨年就任しました。誰もがいきいきと参加する高齢社会のこれからの姿を皆さんと考えていければと思っています。

さわやかおう　1月号

通巻365号　2024年1月10日発行
（毎月1回10日発行）
表紙絵　池田げんえい
イラスト　すずきひさこ
福島康子
レイアウト　菊池ゆかり
印刷所　日本印刷株式会社

発行人　清水肇子
発行元　公益財団法人さわやか福祉財団
〒105-0011
東京都港区芝公園2-6-8 日本女子会館7階
Tel (03)5470-7751　Fax (03)5470-7755
E-mail pr@sawayakazaidan.or.jp
https://www.sawayakazaidan.or.jp
Printed in Japan

無断複写・無断転載はご遠慮ください©

さあ、言おう 1月号
令和6年1月10日発行
（毎月1回10日発行）
通巻365号
発行人 清水肇子
発行元 公益財団法人さわやか福祉財団
〒105-0011
東京都港区芝公園2-6-8
日本女子会館7階

いきがい・助け合いオンラインフェスタ2023

すべての人が幸せに暮らせる社会へ

～オンラインフェスタの動画を公開しています～

昨年10月に開催した「いきがい・助け合いオンラインフェスタ2023」から、オープニングフォーラム、クロージングフォーラム、そして特別編「分身ロボットカフェDAWN ver.βを訪ねて」の動画を財団ホームページで公開しています。

フェスタ参加者以外の方も閲覧可能です。ぜひご覧ください！

財団HPトップページ右上の**「オンラインフェスタ」**バナーをクリックしてください

【財団ホームページURL】
https://www.sawayakazaidan.or.jp

オープニングフォーラム

特別編
「分身ロボットカフェ DAWN ver.βを訪ねて」

クロージングフォーラム